

戦争が始まったら、すぐ内地に引き揚げることだ。そして何よりも、戦争を起こさないことを祈るばかりだ。

色々な趣味を楽しみ、畑に野菜を作り、季節ごとに果物を作っては子供や友人たちに送り、喜ばれた。私は経済的にも安定し、精神的に充実した生活を過ごさせていただいていることに感謝している。過去の苦しみは現在の幸せのもとになっていると思ひ、心の財産が豊かになるように願ひながら日々を送っている。合掌しながら。

赤肌の赤峰はどうなっているだろうか

藩陽市の復興は今いかに

昔の影は今ほ思い出

幾多の人間模様を刻み

個人の復興が国の繁栄と

夢を追って生きている

共に語らい龍 立ち上がる

私の生活 心豊かに

避難乞食行^{こじき}

茨城県 岩間 重雄

一、おいたち

私は大正十五（一九二六）年十二月三日、父誠夫と母すゑの次男として生まれた。出生地は茨城県東茨城郡縁岡村である。私の上に兄一人と姉が五人、そして私の下に妹三人ができた。十人の兄弟姉妹である。當時は「産めよ殖やせよ」というのが国策であったので、父は厚生大臣表彰を受けることになり、全校児童が整列している前で村長から賞状が渡された。私は友達に冷やかされ、気恥ずかしい思いをした記憶がある。

大家族のため生活は苦しかった。姉五人は良くできて、それぞれ女子師範を卒業して教師になり、家業を助けたことは村でも話題になった。反面、男二人はあまり出来が良くなく、何かにつけて姉たちと比較され

た記憶がある。

二、渡満のきっかけ

私は水戸農学校二年生のとき、「決戦非常措置要項ニ基ク学徒動員令」が発令され、建設勤労奉仕隊の一員として三カ月間満州に渡り小麦の収穫を手伝った。満州は建国十周年記念行事が終わったばかりで、そのときの高揚した気分がまだ残っており、また広い農地での農作業を通して満州は好ましい新天地であり、素晴らしい国という印象を強く受けた。そして、将来でできればこの国で働きたいと思った。

十二月の卒業を間近に控えた昭和十八（一九四三）年十月半ば、新田さんが入会者勧誘のために来校された。「満州は王道楽土、五族協和、やりがいのある仕事である」と協和会に入会することを勧められた。私は以前勤労奉仕隊として満州に行ったときの好印象もあって協和会に入ることを希望した。新田さんは水戸農学校から早稲田大学を出て協和会に入った先輩である。

三、渡満後の職場

昭和十九年一月上旬、協和会中央錬成所に入所することになって玄界灘を渡った。アメリカ軍の潜水艦が出没する海域であったが、無事に釜山港に上陸することができ、特急ひかりで新京（長春）に着いた。真冬の新京は気温が零下二十度にも下がる。初めて体験する寒さであったが、歩いて中央錬成所に着いたときには全身汗ばむほどであった。錬成所には永井正所長のほか、日高政一先生、斎藤晟先生、吉沢順先生がおられた。ここで四カ月間にわたって協和会会務職員として必要な基礎事項について厳しい教育を受け、五月には無事終了した。

私の任地は牡丹江省綏陽県本部に決まった。任地に出发する前に、水戸出身の江見千尋先生の所へ挨拶に行った。先生は「綏陽の事務長浜田武夫は、私の親友であるからくれぐれもよろしく」と言われ、事務長宛の紹介状を頂いた。

牡丹江行きの列車に乗って牡丹江省本部に到着したのは夕方六時ごろであったので、その日は宿直室に泊

めてもらうことになった。

翌朝、定刻には職員が出勤したが、事務長は出張しておられ、不在のため庶務科長に挨拶をした。四月一日付けで綏陽から省本部に転勤してきた佐賀出身の清水国廣さんが綏陽の状況をいろいろ教えてくれた。

省本部を出て任地綏陽に向かった。河西駅カキガイで綏芬河スイフンガ行きに乗り換えたが、その列車があまりに粗末な作りの車両なので、前に座っている人に事情を聞いたたら、東鉄時代にロシアから接収した骨董的価値のあるものだと言われた。

目的地の綏陽駅についた。駅の出口には憲兵がいて身分証明書をチェックするなど、国境近くの街の厳しい雰囲気を感じた。駅を出たところで協和会職員、張存書さんと辺見讓さん二人の出迎えを受けた。五月の綏陽は街中が花園で、薄紫色の迎春花が可憐な花を咲かせ、白樺林は萌黄色の若芽を伸ばしている。王道菜土そのものであった。

四、協和会の思い出

牡丹江省綏陽県本部では事務長浜田武夫さんや青少

年班長辺見讓さんと、良い先輩に恵まれ楽しい職場であった。ところが七月、辺見班長が召集され、青少年班の日系は私一人となった。九月はじめ、大使館兵事科から十一月入隊の鮮系三十五人の訓練を依頼された。私自身軍歴がなく、水農時代の学校教練と中央錬成所の合同訓練しか受けていないので、うまく教えられるかどうか心配であったが、浜田事務長と軍事教官山中准尉の指導を受け、無事二十日間の訓練を終えた。

五、終戦前の状況

昭和二十年五月、私が県本部に勤務して満一年たち、どうやら一人前に業務を進められるようになった。訓練生三十余人の教育が終わり、八月六日査閲を受けたのち修了式が盛大に行われた。修了式後、訓練生は卒業、帰郷となるのであるが、県公署から要望されていた酒石酸の原料となる山ブドウを採るために、三泊四日の予定で老菜営の国境に近い山林に向かった。その年、山ブドウは豊作で収穫が進み、予定より一日早く八日夕方下山した。夜は訓練生の慰労とお別

れの会食が行われた。会食が終わって官舎に戻った。この夜は雨だったがやがて雷鳴を伴う豪雨となった。一日早く切り上げてよかったなと思いながらそのまま寝込んでしまった。

八月九日午前五時十分、雷鳴とは違う爆音と炸裂音で目が覚めた。「ソ連軍の攻撃だ」と連絡を受け、訓練生を待機させて私は県本部に走った。浅利事務長は「国境紛争、越境侵犯程度であろう。十日もすれば目鼻がつく」という判断である。綏芬河の協和会分会長からは「綏芬河地区義勇奉公隊全員防衛配置完了」と勇ましい報告があった。東満省長はソ連軍越境、牡丹江市に空襲警報発令の第一報を聞いて「この忙しいときに何の演習だ」と言ったと後で聞いた。結果論だが、この時点でこの後の悲劇を予見した人はいなかった。

日が高くなるにつれて、ソ連機の攻撃も激しさを増した。超低空で襲ってくる操縦手の顔が見えるほどだ。訓練生は協和会の防空壕に避難してきた日本人を誘導したり、防空壕の上に官舎の畳を敷いたりかいが

いしく働いていた。

午後四時ごろ、県公署へ出向いていた浅利事務長から電話で「毛布一枚と身の回りの品を持って県公署裏手に集合、山に入る」と言ってきた。満系社員三人と出発した。途中、ソ連機にしつこく狙撃されたために指定場所に着いたときには事務長たちは出発してしまっていて人影は見えなかった。まごまごしている間に満系社員はどこかへ消えてしまい、私一人になった。どうしたものかと思っていたとき、西側の道を兵隊たちが足早に引き揚げていくのが見えたのでその後について行くことにした。綏西方向へしばらく進んだとき、砲弾がヒュルヒュルと音を立てて頭の上を飛び越し、前方百メートルくらいの山裾に落下して爆裂、土煙が上がった。その砲撃は三分間に一発ぐらいの間隔でしばらく続いた。そのうち陸軍病院の人たちに追いついた。赤十字のマークのついた鞆を肩に掛けた看護婦さんが「今晚歩き通して明朝は穆稜ボクリマ、さあ元氣を出して」と周囲の人を励ましながら頑張っていた。

道路には家財、家具、衣料、トランクなどのほか

に、鉄帽、背のう、防毒面など軍装品も散乱している。

六時半を回ったころ緩西駅に着いた。駅舎や軍官舎が燃えていた。少し進んだとき真正面から機銃掃射を受けた。ちょうどそのとき避難民をいっぱい乗せて走っていた列車が猛烈な機銃掃射を受けたが、列車は止まる気配も見せずに走り去った。その夜は三道河子サドウガン近くの山林で一泊した。

六、山また山の逃避行

明けて十日、からりと晴れ上がって朝から暑い。しかし静かだ。昨日の空襲などうそのようである。歩き続けて穆稜近くで広い道路に出たところで兵隊百人、警官三十人、民間人十人ほどの集団に会い元気が出る。それから三十分くらいたったころ、後ろからエンジンとキャタピラーの音が聞こえた。皆、戦車だと直感してクモの子を散らすように山へ逃げ込んだ。私は道路に近い流れのそばの草むらに身を潜めた。こともあろうに戦車は私の前で止まり、戦車兵が小川の水を汲んでラジエーターに入れ始めた。早く行ってくれな

いかといらいらしていると、反対側のがけの上に逃げ込んでいた兵隊がソ連兵めがけて発砲した。ソ連兵は慌てて戦車に戻りめっちゃめっちゃに機銃を撃ち始めた。私が目標でないとは分かっているが、頭の上でガンガンやられてはたまらない。戦車は二百発くらい撃つただろうか、最後に戦車砲を一発撃って穆稜の方へ走っていった。

私は今度は峰伝いに穆稜を目指した。下の道路をソ連のトラックが一台砂塵を巻き上げながら走っており、時々止まっては民家に火をつけている。後続車への目標のつもりらしい。しばらくすると今度はトラックの集団が通過するようになった。夜になっても次から次へとトラックの行進は続いた。

十二日は朝から雨。私はここから別行動をとって一人で牡丹江方面に向かった。数日歩いて寧安ネイアに出た。ここでも難民が南下していて、私は牡丹江林業局の小松さんと一緒に行動することにした。

石頭で新京第一中学校の生徒に会った。四年生だという。五十人くらいの編成で六月から七月いっぱい

約束で東寧の農作業奉仕に動員されたが、八月半ばまで延長されたのが災難であった。運が悪かったため息をついていた。生徒も大変だが引率の先生は生徒を親元に届けるまで寝る暇もないほどの忙しさであろうと思った。

八月十八日、まもなく東京城というとき後方から日本軍のトラックが追いついてきて、乗っていた憲兵准尉から敗戦を知らされた。

さらに三日歩いて牡丹江市に到着した。市の治安は最悪で日本人は惨めであった。私たち二人は中国服を着ていた。冒険であったが、凶佳線の柴河サハガに住む中国人の張さんを訪ねて町外れの一軒家を借りてもらい逃避行の疲れをいやすことにした。八月も既に二十三日。東寧は秋の気配が強くなってきた。

七、柴河での出来事

柴河では中国人の自警団の組織が整っていた。組織ができてからまだ一週間ほどらしいが日本軍の銃を装備していた。逃避する日本兵が捨てたものか、小集団で逃避する日本兵を襲って奪ったものらしい。

早朝、中国人の婦人が訪ねてきた。話を聞いてみると実は日本人で、使用人の中国人に着付けしてもらったという。疲れているので休ませてほしいという。身分ある人らしく、二日ほど静養して出発していった。

ある日の夕方、暴民に襲われて玉蜀黍畑トウモロコシに隠れていた五十代の夫婦と娘さんの三人を見つけ、家に連れ帰ってかくまった。最初私たちがを中国人だと思って警戒していたが、日本人と分かって話をするようになった。その日は家に泊めて翌日収容所に送り届けた。

夕方散歩に出たとき、高粱畑の入り口で三歳くらいの女の子が駄菓子袋を持って泣きべそをかいているのに出会った。どうしたのかと聞いたら「母ちゃんがすぐ戻るからと言いついて行ったまま帰ってこない」と言う。お父さんも兵隊にとられたままとのこと、すぐそばには牡丹江の本流が流れていて危険なので、とりあえず家に連れて帰って休ませた。張さんに相談したところ、難民収容所に送るのも無理、私が預かって落ち着いてからよい方法を考えましようと言ってくれた。母親もどうにもならずこのような手段しか残され

ていない、何とも哀れな話である。

八、歴史が変わる

九月半ばごろであったか、張さんが牡丹江市へ行つて聞いてきた敗戦の状況を聞かされた。日本は無条件降伏、満州国は崩壊、関東軍は武装解除、日本人は本土へ強制送還など、まさに青天の霹靂であった。

何はともあれ、満州国崩壊の話聞いては長居は無用。九月十七日、張さんにお礼を申し上げて柴河を出発した。

出発してからしばらくして、腐乱した何体かの死体を見た。嫌な思いがした。途中、ソ連兵に呼び止められて荷物検査をされたが無事に通過、牡丹江市郊外の日本軍捕虜収容所に着いた。収容所はまだ工事中であった。軍曹が指揮官で、外柵を作っていた。作業員は三人が一組になって、十組くらいが木杭を打ち込んだり、打ち込んだ杭に有刺鉄線を張り付けたりしていた。また、庭には衣類の支給を受けるために百人くらいが並んでいた。整理して何か説明を聞いていたり、シャツ姿で体操していたりいろいろだが、いずれもこ

れで先が見えたという安堵感からか明るい顔をしていた。

日本軍捕虜収容所の隣は日本人難民収容所だった。日焼けし、ぼろを着て、男女の区別もつかないような人たちが談笑していた。何日間も飲まず食わず、いろんな迫害に耐えて逃れに逃れ、やっとたどり着いたこの収容所が安住の地に思えるのであろう。しかし、収容所の周りからこれを見る中国人の目には、侮蔑的な光が見えた。

私が牡丹江駅に到着したのは午後八時ごろで、駅周辺ではソ連兵が勝利を祝うつもりか、空に向けて曳光弾を打ち上げていた。花火のように華やかに見えた。牡丹江駅から貨物列車に飛び乗り翌朝ハルビン着、線路沿いに新京に向かって歩いた。牡丹江ではほとんど見られなかった日本人は、ハルビンでは目に付くようになった。日本人に対する危険が少なくなったのである。線路沿いに歩く人の列が続いていたが、それはまったく、乞食同然の姿であった。

新京駅には夜十一時ごろに着いた。駅はいろんな人

でごった返していた。人込みにまぎれて日本人を目当てに、凶器を隠し持った少年強盗団が待ちかまえていた。というので、中国公安官が目を光らせて警戒していた。

夜が明けてから、室町在満国民学校が難民収容所になつてゐるのを知り、給食を受けた。

ここで協和会官舎の所在を聞いて官舎に行つてみた。協和会機関誌『協和運動』に時折投稿されていた高橋勝治氏の表札を見つけ案内を請うたが返事はなく、だれもいないのかと思つて引き返そうとしたとき、だれだと怒鳴られた。事情を話したらその人が高橋氏であつた。私はすぐ残務処理事務所へ案内され、退職金と被服を支給されて四十日に及ぶ逃避行が終つた。昭和二十年九月二十三日であつた。

九、奉天の難民生活

南満の商都奉天（瀋陽）には、北満からの難民が大勢集まつてきていて、多くの人がにわか商人になつたり、作業員になつたりして生計を立てていた。春日町、弥生町には屋台が並び大変なにぎわひであつた。

私も一時菓子店の餅つき作業などを手伝つていたが、十一月になつて満鉄の人からソ連軍のポイラー管理を頼まれ、軍が引き揚げる二十一年三月まで勤務した。

国府軍が奉天に進駐してから、日本人の引揚げが始まつた。各隣組に作業の割り当てがあつたが、私は若いからといつても積極的に引き受けた。七月ごろ、引揚げが最盛期を迎えてからは、日僑服務工作留用隊員として公共施設、公園、道路などの清掃、補修作業に従事したが、炎天下での作業はきつかつた。思い出すのは、ハルビン、新京方面からの引揚列車が通過して行くときである。トイレがついていない有蓋貨車に乗せられてゐる人達が、わずかな停車時間に所かまわず用足しをする。その始末に苦勞したものである。

十、帰国

昭和二十一年十月三十日に乗船、葫蘆島^{コッパ}出港、十一月五日に博多港上陸、十一月九日に水戸駅に着いた。駅に降り立つて見た水戸市街は一面焼け野原で、焼け焦げた柱に古トタンの壁と屋根をかぶせたバラックが建つてゐるだけだつた。

兄は戦死しており、私は農林省統計情報事務所に勤務しながら、猫の額ほどの農地を耕す典型的な第二種兼業農家として四十年を過ごしたが、昭和六十一年定年退職し、妻と静かな毎日を送っている。

スパイ容疑と国籍剝奪に

さいなまれて！

東京都 福久 かずえ

一 運命の八月十五日

私は、大正十五（一九二六）年の八月十九日に大連で生まれて以来、満州で育った。昭和二十（一九四五）年八月十五日の終戦時には、旅順リョウシュンにあった師範学校女子部に在学中であった。電気技師であった父をはじめ一家は、河北省の承德ショウタイという所で暮らしていたので、終戦の日を境として生き別れになってしまった。同じ旅順師範学校の男子部に在学していた弟は、七月の初めに学徒出陣したので、身寄りはいなく

独りぼっちになってしまった。

運命の日の八月十五日、私たちは校舎の裏庭で防空壕を掘っていたが、そこに突然、日本の無条件降伏の玉音放送が流れた。何と、「戦争は終わったのだ！日本は負けたのだ！」ということだった。最初は漠然としていて、その意味が良く分からなかったが、だんだんと時間が経つに従ってそのことの重大さに気が付き、大きな衝動を受けて出る言葉がなかった。

戦局の実情もあまり知らされずに、日本軍の実力の認識にも欠けていて、無知に近い状態だった私たち女子部の生徒にとって、どうしても信じられないことだった。二、三日はまだ、夢の中の出来事のような気がしていた。

しかし、八月末ごろになると、旅順にもソ連兵が多数進駐してきて、学校にもなだれ込んできた。私たちの目の前で、銃剣を突き付けて乱暴な行為を繰り返したが、それを見たときに、敗戦という事実を身をもって確認した。信じられなかったことが一挙に氷解してしまった。何をする暇もなく、どうするかと考え